

アニメで知る心の世界

こもれ心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：天気の子 3 回目

空想と反逆とエディプスコンプレックス

I. 空想と現実の狭間で生きる登場人物

前回主人公、森島帆高の行動は、「キャッチャー・イン・ザ・ライ（ライ麦畑で捕まえて）」の主人公ホールデン・コールフィールドがとった行動と似ており、今までの生活に欺瞞を感じ、そこから抜け出し、大都会に理想を求め、この物語が始まったと述べてきた。それはエディプス・コンプレックスからの逃避であり、大人という助けなしでも独力で社会で生きていけるという万能空想に他ならない。それ故に儚くも脆く崩れやすいものである。帆高も同様に裸一貫で来た東京での生活に入れず、ホームレスに近い状態になるが、帆高は仕方なくも須賀への助けを求めた。しかしそれが、彼の**万能空想からの脱却**を意味する重要な瞬間でもあり、帆高が、初めて他者の助けを素直に求めた瞬間だったとも言える。

そしてそこで出会った人々（陽菜、凪、須賀、夏美この4人）は帆高と同じように心の傷を抱えた人々であり、**現実の喪失や困難を受け入れることができず、万能空想や否認によって現実から逃避しようとする心理構造**をもっており、彼らと交流し、互いに奇妙な形で支え合う中で、帆高は自分自身を見出していくようになる。

具体的には以下のような共通点が見られる

1. 喪失の否認

- 帆高：家族や故郷との関係の困難を否認し、独力で生きられるという空想を抱く

- 陽菜：母の死を受け入れられず、自分が母の役割を担うことで家族を維持しようとする
- 凧：母の死という喪失を否認し、姉に迷惑をかけないように自分を押し殺す
- 須賀：妻の死を受け入れられず、現実逃避的な生活を送る
- 夏美：大人になることへの不安を否認し、学生的な自由な生活にとどまろうとする

Ⅱ. 「ハレ」と「ケ」から天気を読み解く

1) 「ハレ」と「ケ」

「ハレ」と「ケ」とは、柳田國男によって見出された、日本人の伝統的な世界観のひとつ。

- **ハレ**: 特別な日、儀礼、年中行事など、日常から離れた非日常的な時間や空間を表す。例：結婚式、お祭り、正月など。
- **ケ**: 日常生活、普段通りの時間や空間を表す。例：仕事、家事、私たちが日々を送る中で経験する出来事。

日本では、戦後から高度経済を経て、大衆消費社会になったことで、派手な物、美味しい物が手軽に消費出来るようになり、ハレとケの区別が曖昧になった（どちらかと言えばハレが続いている状態になった）と言われている。

一方で、ある意味、現代社会を描いている「天気の子」では雨の日がずっと続いており、非日常的な空間などなく、常に同じ日々が繰り返されている。雨は登場人物にとって息苦しさ、孤独感、閉塞感を象徴しており、彼らにとってずっと「ケ」の状態が続いていると考えられる。

2) 帆高の「ケ」

帆高は上京し、仕事もみつからず、ホームレスに近い状況になり、雑踏な都会の海に飲み込まれそうになる。しかし須賀に助けを求め（フェリーで甲板から海に落とされそうなところを圭介に助けてもらうシーンは、帆高の東京での生活の暗示の様にも感じられ

る。)、彼の仕事の手伝いをしながら、須賀、夏美との共同生活が始まる。そのシーンでは帆高は日々の活動に追われ、時に須賀に仕事で叱られながらもイキイキとした様に描かれている。

ここに象徴している様に帆高は須賀達に抱えられながらも、一人の対等な存在として扱われる中で、人間らしい生き方を取り戻し、大人への階段を登っていき、エディプス葛藤に向き合う準備となる。

そして上京して、困窮していたときに出会った陽菜と再会する。(ここが竜とそばかすの姫の主人公さすが〈U〉で自由に歌えるようになり、ルカちゃん、しのぶくんの中に入っていこうとするシーンを彷彿とさせる。)

3) エディプス葛藤と「ハレ」

帆高は路地裏のホテル内に誘い込まれそうになって陽菜を助け出そうとする。しかしその試みはうまくいかず、チンピラのような金髪の男性が馬乗りになり、帆高は殴打されてしまう。それがこれまで帆高が受けてきたエディプス葛藤の再演のようにも感じられる。しかしその後、帆高は拳銃を殴打(おうだ)する彼に向け、発砲する。

→拳銃は「男性」の象徴であり、殴打され続ける中で拳銃を発砲したことは、帆高がこれまでの自分とは違い、大人達に立ち向かえる力を持っているということを誇示している様にも感じられる。しかしそれは社会的に好ましくない形での誇示である。そして前回、その後の帆高と陽菜のやりとりを考察した。

帆高が体を張って止めてくれたことに陽菜は感謝の念を感じている一方で、拳銃を持っている帆高に対し、チンピラと同じような存在なのではないかという疑心の念を抱いていたと思われる。それゆえに帆高に強い口調で問い詰めたのであろう。

帆高が拳銃を所持しているという事実は、周囲に対する攻撃性を表す一方で、彼の内面の不安定さを象徴していると考えられる。それは、エディプス葛藤において、父親に対する抑圧された感情が暴力的な形で現れる可能性を示唆している。陽菜が帆高をなじったのは帆高にそういう大人になってほしくないという陽菜の思いが込められている様に感じられる。(「シン エヴァンゲリオン 劇場版」のシンジとゲンドウが対峙するシーンで「暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではない」とゲンドウが告げたシーンを彷彿とさせる。

)

そこで、帆高が拳銃を投げ捨てたことは、暴力的解決はしないという誓いの象徴である。だからこそ陽菜は帆高に近づき、自らの秘密、彼女が「晴れ女」であることを教え、親しくなったのだろう。

ここで陽菜が「来月で18歳」と偽ったことが興味深い。彼女はまだ未成年だが、もう少しで成人になれるということ、帆高より年上に振る舞いたいという思い、そして家出して身寄りのない帆高を親の様にかくまい、一緒にいたいという色々な思いが陽菜にはあったように感じられる。（そしてお互いに対等になるには未熟なのだろう。）そしてなにより、帆高と対等な存在になろうとしなかったのだろう。それはとりもなおさず帆高に対して恋愛感情を抱くことを恐れていたようにも感じられる。そして帆高と陽菜は互いが希望の光（「ハレ」）の存在へとなくなっていく。

これから陽菜が晴れ女として、帆高と陽菜は晴れビジネスを展開していく。

4）陽菜の社会的役割の獲得と自己犠牲と「ハレ」

帆高と陽菜が知り合い、お互い社会に溶け込めないで、同じ境遇の存在を知った喜びは互いにこの上なく、夢のようなものであったであろう。そこで帆高と日向は関係性を深めていくのではなく、昇華するかのように晴れビジネスを展開していく。そのビジネスは評判を呼び、瞬く間に広がり、メディアでも注目されるようになっていく。それは雨の日が続く束の間の「ハレ」の空間である。神宮外苑花火大会の日に陽菜が言ったセリフが象徴的である。

陽菜：この仕事。晴れ女の仕事。私ね、自分の役割みたいなものが、やっと分かった——
——ような気が、しなくも、なくもなくも、なくもなくもなくもない

この発言から陽菜はこのビジネスを通して自分が社会的役割を持ち始め、充実感を感じ始めている一方で、それでいいのか？という不安が混在した思いを語っているように感じられる。

しかしこの晴れビジネスは場当たり的な発想であり、二人の置かれた困難な状況から目をそらすかのようなものである。一種の現実逃避であり、お互いが抱いてきた孤独感や不安感を否認する躁的防衛のような状況になっているように感じられる。

そして陽菜に関して晴れビジネスで瀧くんの祖母富美さんの家に訪れたシーンで

富美：旦那の初盆くらいは、晴れにしてやりたいと思ってね
と言ったのちに
陽菜：じゃあ、うちのお母さんも初盆なんだ……

といった言葉があまりにも人ごとのようにあっさりと会話が終始していたのが印象的であった。もちろん彼女らしくまわりを気遣い、心配させないようにそのように振る舞ったとは思えるが、母の死に対してある種の否認が働いているようにも感じられる。

以下のボウルビィのいう心理過程に沿って考えるならば、

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

- ①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）
- ②思慕と探求・怒りと否認の段階
（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）
- ③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ体験）
- ④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

①もしくは②の状況のように感じられ、陽菜は母の喪失が受け入れられず、母が生前の頃の生活を今も続けていこうとしているように感じられる。そしてそこで生じる葛藤を無かったことのようにしているように感じられる。富美さんは

富美：あの煙に乗って、あの人は向こう岸から帰ってくるんだよ。お彼岸。空の上は昔から別の世界さ

と言っているが、空の上を向こう岸（あの世）と考えることで、陽菜の母にまつわる情緒的葛藤を向こう岸へと排除させ、彼女自身の心を安定させようと考えていたのかもしれない。

次のシーンで神社の神主が夏美と圭介に龍の天井画を解説しながら天気の巫女について次のように言及している。

神主：天と人とを結ぶ細い糸がある。それが天気の子だ。人の切なる願いを受け止め、空に届けることのできる特別な人間。

晴れ女である陽菜は、まさに巫女のような存在だったと言えるだろう。

以前、番組で『君の名は。』を取り上げた際、主人公の三葉は高校生でありながら宮水神社の巫女を務めているという設定に着目した。巫女とは、神を祀り、神に仕え、神意を世俗の人々に伝える役割を担い、村の人々と神との間を繋ぐ存在、つまり村のアイデンティティの象徴である。吉本隆明は、巫女を「村の共同幻想と融合している」存在と捉えていた。（ちなみにアイドル達はファン達の共同幻想と融合しているように感じられ、アイドルはある種現代の巫女的側面があるのではないだろうか？）

一方で、三葉は一般的な高校生としての自我も持ち合わせており、巫女であることに違和感を覚え始める。この葛藤を乗り越えられずに、宮水神社の巫女として、代々受け継がれてきた共同幻想（糸守町の伝統、災害からの守護という使命）と融合し、最終的には彗星災害の犠牲となることが運命づけられ、彼女は暮らす糸守町とともに、自身の自我をも失ってしまう。これは、自分の存在意義を晴れ女であることにのみ見出している陽菜にも当てはまる。

陽菜が晴れ女であり続けることは、当初の三葉と同様に、巫女としての生き方を選ぶことである。それは「晴れ女」という超自然的な能力によって、東京の天候という共同幻想的な要請（みんなの願い）に応える存在となり、最終的には「犠牲」として消失することになってしまう。この状況を変えるためには、『君の名は。』の瀧のように、陽菜を愛し、彼女の苦悩を受け止め、彼女を救い出す存在が必要となる。それが帆高なのである。陽菜と帆高が互いのことを思い抱く幻想、吉本隆明はそれを対幻想と言っている。吉本隆明は共同幻想と対幻想は逆立するというのが、精神分析的に言えば、それこそが自我の目覚めなのである。

5) 凧の提案と「ハレ」

しかし帆高は陽菜に対して煮え切らない態度をとり続けている。それで陽菜の弟の凧に帆高は相談するが、その態度に業を煮やした凧との会話シーンを取り上げる。

凧：——指輪だね。間違いない

帆高：え、マジ、いきなり指輪!? え、それって重くない？

凧：誕生日プレゼントだろ、姉ちゃんの？

帆高：うん。他の女の人にもリサーチしたんだけどさ——。一ミリも役に立たなくてさ。……でもそうかー、指輪かあ……うーん……。

凧：——帆高さあ、姉ちゃんが好きなんだろ？

帆高：え？……—えええええっ!? いやいやいや、別に好きとかじゃなくて……え？
いや俺もしかしてそうなのか？ え、いやいやいやいつから？ もしかして最初から？
えええええ!?

凧：あのなあ、はっきりしない男が一番ダメなんだよ

帆高：え、そ、そうなの？

凧：付き合う前はなんでもはっきり言って、付き合った後は曖昧にいくのが基本だろ？

帆高：凧センパイって呼んでいいすか？

凧：——母さんが死んでから、姉ちゃんずっとバイトばっかです。それはきっと、俺のためなんだ。俺まだガキだからさ

帆高：……

凧：だから姉ちゃんには、もっと青春っぽいことしてほしいんだよね。……ま、帆高でいいのかは分かんないけどさ

【考察】

帆高の煮え切らない態度に凧は単刀直入にアドバイスを送っている。凧自身にとって帆高はよそ者であり、当初は警戒心や不信感を抱いていたように感じられる。しかし晴れビジネスを一緒にするなかで、陽菜、帆高、凧の3人の関係が非常に活気あふれたものになり、信頼関係が生まれ、この関係性が続いて欲しいと凧は感じたと思われる。(陽菜も晴れ女の仕事に自分の役割を感じたと話していたが、もしかしたら、この三者の関係性に居心地の良さを感じたのからこそ、その発言をしたのかもしれない。) だからこそ凧は帆高と陽菜が付き合っただけで欲しいと感じたからこそ、このアドバイスを送ったように感じられる。そして帆高の陽菜のプレゼントに対して凧は即座に「指輪」と答えたが、「指輪」は一般的に永遠の絆、約束の象徴である(一方で帆高が「重くない?」と言ったように指輪は束縛の意味合いもある。そして帆高自身も責任を持つことの怖さがあるようにも感じられる。)。だからこそこの関係が長く続いて欲しいという思い、そして「姉ちゃんには、もっと青春っぽいことしてほしい」と語っていたように、この関係性を続けながらも陽菜が自我を持ちイキイキとした生活を送って欲しいという思いを帆高に伝えているように感じられる。